

日本スポーツ社会学会会報

Vol.58 号



目次

1. 会員によるリレーエッセイ
2. 編集委員会からのお知らせ
3. 研究委員会活動報告

編集後記

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
広報委員会 2013年12月

1. 会員によるリレーエッセイ

「回想—スポーツ社会学とのかかわり—」

金崎 良三（福岡女子大学）

私は、体育専攻の学生として1964年に広島大学教育学部に入学したのですが、2年生まではどちらかといえば運動生理学や体育心理学の分野に興味がありました。ですから、社会科学系の人間というにはほど遠い存在でした。それがどうして、スポーツ社会学を専攻するようになったかといえば、3年生になってから三好喬先生のゼミを受講したことがきっかけとなりました。当時、ゼミで講読していたのはP. C. McIntoshの”Sport in Society”（1963）という原書でした。受講生みんなですしつづつ頁を割り振り、その日の担当者がレジメを配って発表し、その内容についてみんなでディスカッションするという授業でした。研究室で行われたこのゼミは、初めて経験する少人数の授業で雰囲気もよく、とても気に入りました。将来は、自分もこうしたゼミを担当できる教員になりたいと思ったものです。つまり、指導された三好先生の専攻がたまたまスポーツ社会学であったことから、私もこの分野を目指すことになったわけです。

1968年に東京教育大学（現筑波大学）の大学院に進学しましたが、その当時体育系の大学院といえばこの他には東京大学にしかなく、どうしても東京に出ていかなくてはなりません。大学院では、体育社会学研究室に所属し、竹之下休蔵先生と菅原禮先生の指導を受けました。竹之下先生は、わが国のスポーツ社会学の祖といわれた方ですし、菅原先生もわが国を代表するスポーツ社会学者です。ここでは、内外の文献の講読をはじめレジメの作成と発表、研究室が取り組んだ一流競技選手の社会調査の作業など、その後の研究、教育に役に立つ多くのことを学ばせていただきました。私の学生、院生時代は、スポーツ社会学の萌芽期とっていいかと思いますが、以上の三人の先生方には大変お世話になった次第です。

さて、私が最初に教職についたのは九州大学教養部でした。1972年のことです。ここでは、体育専攻の学生はいなかったので専門教育を担当することはなく、教養科目としての体育の実技と理論を担当していました。研究の面では、社会調査を主な方法としてやってきましたが、コンピュータの発達によって複雑な統計処理が可能になり、特に数量化理論を用いたデータの分析にはおおいに興味を持ってました。結局、この大学には20年間勤めることになったのですが、比較的自由に研究に取り組めた時代でした。

この間、1991年にスポーツ社会学会が発足しました。この組織の前身は、日本体育学会の下部組織としての体育社会学専門分科会ですが、この当時九州大学が事務局を担当していました。事務局員は、私と同僚の多々納秀雄先生の二人です。スポーツ社会学は、わが国では体育専攻の研究者によって主に取組まれてきました。この状況は、現在でもあまり変わっていません。私と多々納先生とで、専門分科会は「開かれた組織にすべきである」、

「体育専攻以外の研究者が学会に入ってきてスポーツ現象の研究に取り組むべきではないか」、「学会も学際的になった方がより活動的、生産的になる」、「そのためには体育学会とは別に独立した学会組織をつくる必要があるのではないか」といった議論を交わしたものです。欧米では、社会学を専攻してきた人がスポーツ社会学にかかわるようになったという例がよくあります。

そこで私たちは、事務局として、前年の体育社会学専門分科会の総会において、「体育社会学専門分科会とは別にスポーツ社会学会を設立したい」、「九州大学が初代事務局を担当してもよい」、「その場合、専門分科会の事務局はどこか他の大学に担当してもらおう」といった提案をしました。何分突然の提案でしたので、総会の空気としては、はいそうですかとはいきませんでした。いろいろ議論した結果、スポーツ社会学会の設立には賛同が得られたのですが、事務局については、九州大学は今のまま専門分科会の事務局を担当せよということになり、結局は筑波大学のスポーツ社会学研究室が初代事務局を担当することになりました。

1991年3月に上智大学において、記念すべき日本スポーツ社会学会の設立総会が、約60名の参加者を得て開催されました。ここでは、ゲストスピーカーとしてイリノイ大学のJohn Loy教授や東洋大学の田原音和教授による記念講演があり、引き続きシンポジウムが持たれました。記念パーティも盛大に行われました。事務局の話では、金額は忘れましたが、学会設立に当たって数百万円の資金を集めたということでした。九州ではこうはいかなかったでしょう。正直いって、あの時初代事務局を引き受けなくてよかったと、後になってつくづく思ったものです。そして、翌1992年3月に日本スポーツ社会学会の第1回大会が奈良女子大学で開催されました。学会設立当時のことは、つい最近のように懐かしく思い出されます。

さて、私は1993年に佐賀大学教育学部に移ってから、専門教育のスポーツ社会学の講義や卒論指導等を担当するようになりました。しかしながら、何分地方の小さな大学でしたので、関連する教科も担当しないと専攻課程の運営ができない状況でした。ですから、スポーツ社会学の他に体育原理、生涯スポーツ論、スポーツ文化論、レクリエーション概論、大学院の体育学特論なども担当しました。ある時期など、体育史やスポーツ心理学も担当したことがあります。こうなると、もう雑学者です。ですから、スポーツ社会学とは、これ一本での研究、教育というわけにはいかず、自分としては細々とかわりを持ってきたような感じがします。2011年3月に佐賀大学を定年退職しましたが、ここでの18年間は学生時代の思いが叶い、とても充実した教員生活でした。

スポーツ社会学会は、今年度で23回目の大会を迎えることとなります。学会発足から20数年が経ちました。最近では、若い人たちがどんどん出てきて、研究の内容や方法も私たちが若い頃とは変わってきたように思います。現在では、学会大会とは別に講演会やシンポジウム、トークイベント、学生のフォーラムなども開催されるようになり、学会活動が活発に展開されているのは喜ばしいことです。また、インターネットを通じて学会の情報

はもちろん関連学会の情報もよく配送されるようになりました。これも、事務局の先生方のお蔭であり、一会員としてありがたく思っています。今後とも、スポーツ社会学会が益々発展していくよう祈りつつ筆をおきます。

2. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 松田 恵示

編集委員会から、「スポーツ社会学研究」への論文投稿のお誘いです。

「スポーツ社会学研究」は現在、年2回、3月30日と9月30日に、投稿論文の締め切り日を設定しています。スポーツ社会学の研究成果を、原著論文や研究ノートなどの種別に依拠して、ぜひご投稿いただきたいと編集委員会一同、心よりお待ちしております。

次の締め切り日は、平成26年の3月30日となります。

どうぞよろしくごお願い申し上げます。

(投稿につきましては、学会HPをご覧ください。)

3. 研究委員会活動報告

研究委員長 西山 哲郎

本年は、前期委員会から引き継いだ二つのテーマ、「教育とスポーツ」「政治とスポーツ」の研究をさらに発展させるため、前者については体罰問題に、後者については招致の決まった東京オリンピックに焦点を当て、学会大会に向けて準備を進めている。

そのうち体罰問題については、まず7月14日に溝口紀子会員を京都にお招きして、元柔道女子日本代表として、また元フランス代表チーム・コーチとして、現状の問題分析と国際比較を行った。さらに、12月13日には合気道七段の思想家・内田樹氏をお呼びして、関西大学で講演会を行った。内田氏は、スポーツと武道の双方が成果主義の導入によっていかにスポイルされてきたかを批判された上で、人類の叡智としての「わざ」の継承・普及の重要性を指摘された。

また、学生フォーラムについては、関西メンバーを中心に学会大会でのイベントを準備してもらおう一方で、関東ではメンバーを一新し、次年度大会に向けて研鑽を積んでもらっている。

